

柴木 寛 著

特 220

890

トラート

平沼騏一郎男は
何故獨身か

その真相を研究す

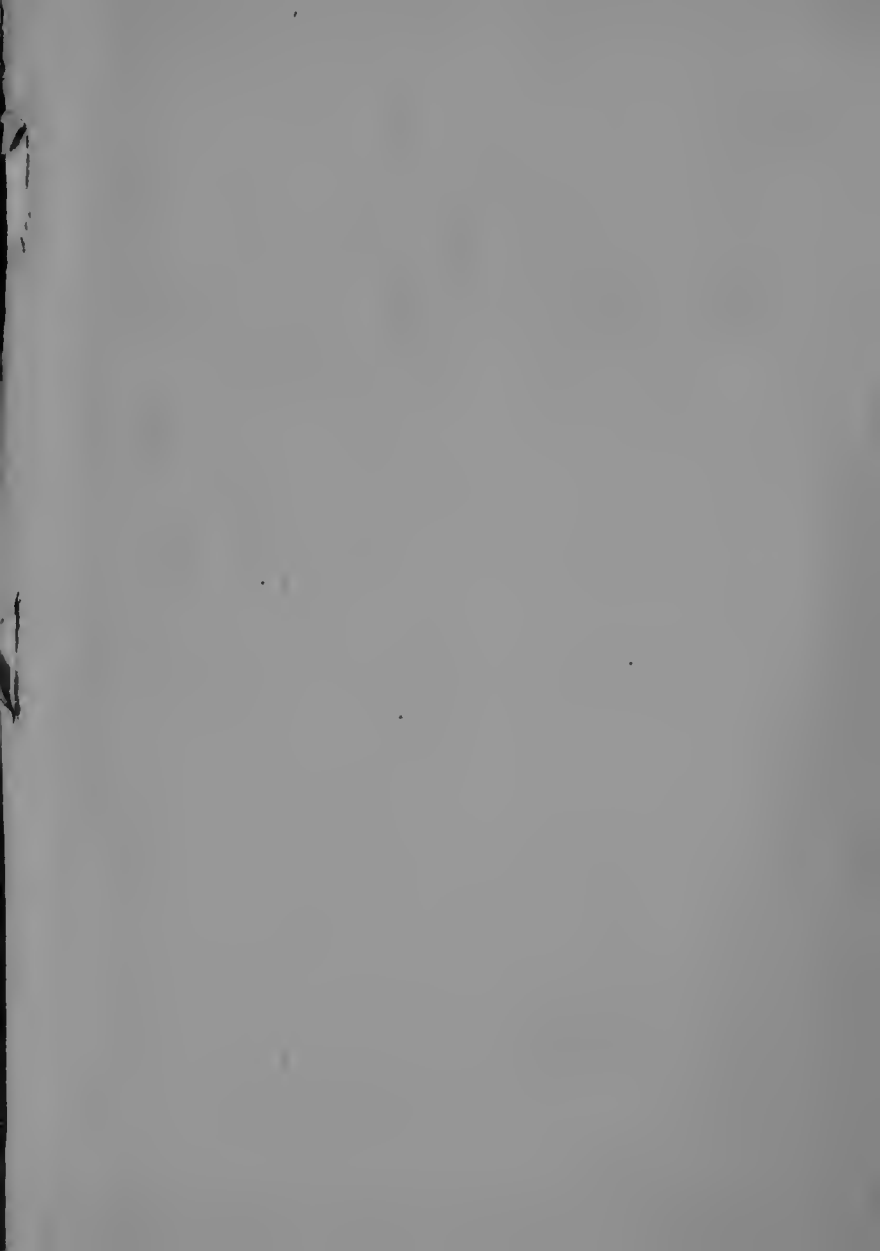
近代人必讀の書



3
4

目次

一、西にヒットラー東に平沼	(三)
二、二人の共通點	(四)
三、彼等の私生活は？であるか	(七)
四、フランス新聞記者の見たドイツ女性の姿	(九)
五、性的エネルギー	(一三)
六、性的エネルギーの昇華について	(一五)
七、英雄と性慾	(一六)
八、人生は四十からといふこと	(一九)
九、愛情と性慾	(二一)
十、結論	(二三)
附録 成功の裏に女性あり	(二五)



一、西にヒットラー、東に平沼

嘗つて永井柳太郎氏は帝國議會で『西にレーニン、東に原敬』と云つて問題を起したことがある。それは思想的內容に於ては異なつてゐるけれども、共に強力な獨裁者であるといふ意味の演説であつたと思ふ。最近も同じ議會で、これと同じやうな問題で社大黨の西尾末廣氏が舌禍を蒙り、遂に代議士を失脚するに至つたことがある。

處で本稿で述べる問題も同じく『西にヒットラー、東に平沼騏一郎』といふことになるのでちよつと恐い様な氣がする。だがこれは政治問題でもなければ、思想問題でもなく、ヒットラーと平沼騏一郎男が、偶然にも獨身者であつたといふ個人問題を取上げたに過ぎないのだから先づ心配はあるまい。否、私はこの小論で、ヒットラーと平沼男が、政治的檯舞臺で素晴らしい功績を擧げつゝあるその人間的內容の分析みたいな、有意義な教養的なものになるかも知れ

ないと思つてゐる。

二、二人の共通點

平沼男とヒットラーは、その長い獨身生活に於て共通してゐる、といふこと以外に澤山の共通點があるやうに考へられる。

日本もドイツも思想的に乃至、政治的にソヴェットのポリシエビズムに對立しており、具體的には防共協定によつて結ばれてゐる。そして一方はその國の宰相であり、一方は獨裁者である。そして共に民族發展の立場を政治家といふ實際的立場から講じてゐる外に、その政治家といふことが、單なる政治家でなしに、確固たる思想の上に立脚してゐることだ。

今更此處に述べるまでもないことだが、平沼男は嘗て國本社の會長であつた。その國本社は色んなことが云はれるにしても、日本人であるといふ自覺に立つた思想團體であり愛國者の集

國であることに間違ひない。

ヒットラーはナチスの首領である。ユダヤ人を放逐しゲルマン民族の血の純潔を保持していかうとする獨逸の愛國者である。そして、それを世界觀にまで結びつけた思想家である。この思想家的な點、哲學的な點に於ても共通してゐる。

尤も以上の事は、洋の東西が異なつてゐながらも、多分に似通つてゐる國情がさうさせてゐるのであつて、殊更とりたてゝ云ふほどのことはないかも知れないが、その外二人の個人的な問題を觀てもやはり相似た點があるやうだ。

全體的に見た感じは、年齢の差もあるだらうが、平沼男は陰性で、こんなことを云つては失禮だが、政治家といふ通念よりは靜かな書齋人と云つたやうな一寸しなびた様な氣がする。ヒットラーは生氣潑瀾としてゐる。これは實に大した相違だが、それで、それが何だか同じものの、半面のやうな氣がする。

ヒットラーは勿論雄辯家である。だがそれは大衆を前にした時だ。それ以外の時は非常に無

けだと云はれてゐる。平沼男の無口は既に定評がある。平沼男はいつも無口で、怒つた様な面構へばかりしてゐるので、政界雀の口さがない連中の間では、若い頃の失戀の結果だと云はれてゐる位である。

この無口であるといふことの外に、二人の共通點は、共に眼が非常に美しいことだ。ヒットラーに會つた人が常に稱へることは彼の眼の綺麗さである。彼の顔や身體全體から受けるものは、世間で云ふやうな英雄的逞しさなんか一つもないとのことである。世間一般の男と少しも變りはないのだが、彼の瞳だけは靜かにすんで人を惹きつける、實に立派な瞳だと云ふ。

その點になると平沼男にも同じことが云へる。既に述べたやうに彼から受ける感じは陰氣である。そして勿論美男子のうちにもかぞへられないだらう。歴代の首相の中でもその點から見るとむしろ下の方に屬するだらう。だが彼の瞳は實によく澄んでゐる。ヒットラーの瞳と同じく、顔全體から飛びはなれて瞳だけが實に綺麗なのだ。少し誇張して云ふと泥の中に寶石が光つてゐるやうだ。これは一體どうしたことであらうか。私はこの瞳の美しさの中に獨身者の持

つ清純さを發見したやうな氣がしたのである。

人々が戀をした場合、その相手に對して性慾を感じないで實に清純な氣持で相手に臨んでゐるのである。初めから性慾を感じるやうでは、それは戀でもなんでもないと思ふ。併しこの性慾を感じないといふことは、性といふことを無視したものであるといふことではない。性的エネルギーをそのまゝの姿、自然な形で發散させるのでなく、一種の昇華作用が行なはれ、一段高い形で發散されてゐることであると考へられるのである。この性的エネルギーの昇華といふことは後章に於て述べるからこゝでは省略するが、この昇華作用を通じてこそ瞳の立派さ、清純さとして精神的美として肉體の一部に現はれるものであると思ふのである。その證據には過淫の人に眼の立派な人はほとんどないのではないか、ヒトラーにせよ平沼男にせよ、彼等二人の瞳の美しさは實に性的エネルギーの昇華によるのであるまいかと思はれる。

三、彼等の私生活は？であるか

ヒットラーにせよ平沼男にせよ、獨身者であることが問題になるのは、彼等の性生活がどんなものであるかといふことであるに過ぎない。だが、これを知らうと思ふ人があるならば思ふ人が無茶だ。私的生活には他人のはかり知れない生活が澤山あるのだが、その中でもこのことは特に秘中の秘である。そんなことを知らうなどいふ考へは、それ自體がいけないことだ。

一般論からすれば英雄は色を好むといふことに相場がきまつてゐる。ある人達に云はせれば英雄が色を好むのでなく、色が英雄を好むのだと云つてゐるが、それは相對的に見たものゝ反面に過ぎないのであつて、女性が英雄的男性を好むことも英雄的男性が女性を好むといふことも同じことである。だが、今、此處で問題になつてゐる、ヒットラーと平沼男は女性が好きてあらうかといふことである。嫌ひでないことは百パーセント間違はない。それが男であるかぎりどんな金佛でも女は好きだ。ヒットラーも平沼男も女は好きであることに違ひはあるまい。だがそれにも増して彼等は女に好かれてゐる。次にヒットラーが獨逸に於て如何に女性に人氣があるかといふことを述べてみよう。次の文はフランスの新聞記者が見たヒットラーと獨逸女

性である。

四、フランス新聞記者の見たドイツ女性の姿

三人の美しいデパートの女賣子さんでした。三人ともお揃ひの服装で、その短い黒スカート、白靴下、木綿胸衣等々いづれもびたりと身に着いた小綺麗さ、赤地のハーゲンクロイツア腕章の語る新興ドイツ女性の標識に如何にも似つかはしいものでした。潑刺たる彼女等三人の姿に眼を惹かれた私の連れの男は私に向つて、

「君、あの美しい娘たちがヒットラーのことを何う考へてゐるか聞いてみてくれ給へ」と求めるのでした。

無論、僕は引きうけました。そしてその三人の若い女店員の一人に尋ねてみました。極めて気軽に尋ねたのですが、突然、店で思ひがけない質問をうけたので少々當惑したらしく一寸ためらつてゐましたが、側の二人と何か相談したあげく、容をあらためて、

「ヒットラーは神様ですわ！」

と應へたのです。

私は十一月の總選舉後のナチ大祝賀行列、スタディアムにおけるヒットラーの演説をも親しく見聞しました。大通りを行く軍樂隊、太鼓隊、黨旗、軍旗、松明等々ドイツの巷は沸き返る騒ぎでした。會場はいふまでもなく超満員の盛況で、聴衆者には少くとも一萬五千の若き女性が涙を浮べてヒットラーの言葉を、姿を熱視めてゐました。ヒットラーの退場する時の彼女等の拍手、興奮、それは斷じて男性等のそれに負けないものでした。そしてお互に顔を見合せては口々に、

「ヒットラーの神殿を建てねばなりません」

とつぶやくのでした。

このやうなドイツ女性の驚くべきヒットラーへの熱情は決して一時的なものではなかつたのです。その後、私は三度目のベルリン訪問をしましたが、彼女等のヒットラー熱は冷めるとこ

るか、益々旺盛のやうに見うけられたのです。私がベルリン街頭で拾つた、次のやうな彼女等の會話は最も雄辯にそれを語つてくれませう。一人の女性はこのやうに語つてゐました。

「妾は兵士の娘です。父は歐洲大戰の時戦死しました。母はそれをこの上もない名譽と信じてゐました。そして妾はいつも軍人の娘として恥ずかしくないやうに振舞はねばならぬと教へました」

「ヒットラーは妾共の誇である軍隊をこんなに立派に建て直して下さつたのです。あの立派な軍装、武威、妾は嬉しくて嬉しくて何といつてよいかわらない程です」

また他の女性は次のやうにいつてゐました。

「妾はユダヤ人が嫌ひなのです。妾はユダヤ人の商店で働いてゐました。店主のユダヤ人はとてもいやらしい奴で、妾を首にすると脅しては妾を誘惑しました。失業が嫌なのでも、その誘惑に打敗かせてしまひ、とうとう身重になつてしまひました。そのあげく何とかかとか難癖をつけて妾を店から逐ひ出したのです。ヒットラーは妾の仇をうつてくださつたのです。こ

れが有難いことだと考へずにゐられるでせうか」

或る女は次のやうに私に話しました。

「妾の父は破産しました。フランス軍が父の財産を滅茶苦茶にしたのです。ヒットラーはきつと仇打してくれると思ひます」

これを聞くと私は

「では貴女は戦争になることを希望してゐなさんですね」

と思はず尋ねました。

「そうです。財産を滅茶苦茶にされて、犬のやうに野たれ死するより潔よく戦つて死んだ方がましです」

と彼女は昂然と應へるのです。

彼女等にとつてはヒットラーは言葉通りの救世主なのです。ヒットラーの命とあれば否應なしに承認するのです。お化粧もやめれば、頭髮を染めることもやめるし、爪にルーデュを塗る。

ことも、絹ものを身につけることも未練なくやめます。子供を持つ彼女でしたらさつそく夫々のナチ團體に入れてユニフォームを着せ、ヒットラーへの忠誠に對するところを少しでも多分に表現しやうと努めることは疑ひありません。

これで彼が如何に女性の人氣の中心點に立つてゐるかよくわかるのである。

五、性的エネルギー

次に彼等の禁慾生活に關聯して一般的な禁慾生活について述べてみよう。

人間の性的本能は、自己保存の本能と並んで、人間の諸慾の中で最も根強いものでありそれは激しい感情を伴ふものである。この性的慾望に捉へられると人間の五感是非常に緊張し、他の普通の時には見られないやうな精神的現象が起つてくる。つまり想像力は鋭くなり、勇氣や意志の力は増大し、頭腦は鋭敏になつて、いろいろの工夫や計畫がつぎ／＼と湧いてくるものだ。世間でよくいふ戀は人を盲目にするとはこのことであつて、戀愛や性的慾望のために精神

が緊張してゐる場合には、實際目前の死も惧れないやうな氣力が湧いてくるものである。

かうした性的慾望に伴ふ精神の緊張や鋭敏になつた頭腦は、若しそれがそのまま諸種の社會的、文化的活動に向けられることになれば、それこそ素晴らしい成績をあげる原動力となるに違ひない。勿論、この性的エネルギーは肉體的な、そして生理的なものであるから、それを他の文化的活動の原動力に轉化するには強い意志力が必要である。この場合誤解してゐけないことは性的エネルギーは決していやしむべきものでないといふことである。性的エネルギーは大きく云へば人間生活の基本的な力であり、社會的發展の原動力である。これなしには人類は滅亡してしまふ。又個人的には性的エネルギーの弱いものは、病氣か、身體のどこかに缺陷があるとみて差支へない。

それで性的エネルギーは、實際のところ旺盛であればあるほど活動的であるわけで、大いによろしいのであるが、この性的エネルギーはそれを自然のまゝに、本能のおもむくまゝに發散させずに、それを他の方面に轉化出来ないかといふことである。

六、性的エネルギーの昇華について

性的本能を自然の姿のまゝに發散させることは餘りいいことでもなければ、美しいことでもない。處で考へられるのはヒトトラにせよ平沼首相にせよ、この性的エネルギーを自然のまゝに發散させずに、自分自身の人生目的のために、建設的努力の中に轉化し、かつ昇華する方法を講じてないかといふことである。

といふのは性的エネルギーを昇華することが出来れば普通の平凡な人間でも、自分を天才の地位にまで昂めることが出来はしないかと思はれるし、そして彼等は何等かの方法でこれを實際にやつてゐるのではないかと思はれるからである。

そして事實、あるアメリカの學者の研究によると人間の仕事の能力と性的エネルギーの関係は次のやうになつてゐるのである。

一、最も偉大な仕事を成し遂げた人達は、例外なく性的エネルギーが旺盛であり、しかも性

的エネルギーをコントロールし昇華してゐるといふ推定が得られるのである。

二、文學、藝術、政治、事業等に於て頭角を現はした人達は、いずれも女性の感化をうけて發奮させられたものである。

この間の消息を示すものは、若し人間や動物から性的エネルギーの源泉である性的ホルモンを切離して除去してしまへば、その人間や動物は全く氣の抜けてしまつた、不精、不活潑な存在になつてしまふといふことである。

つまりこれを逆に云へば、人間の活動力の根本をなしてゐる性的エネルギーを最も適當に、且最も有効に利用すれば、それだけその人は偉大な仕事が出来るといふことになるわけである。

七、英雄と性慾

ヒットラーや平沼首相は果して性的エネルギーを彼等の生命である政治的活動に昇華してゐ

るのであらうが？ 私はその前に歴史に現はれた天才達が彼等の性的エネルギーを如何に轉化したかを彼等の傳記の中から見出してみやう。

樂聖ベートベンがまだうら若い青年時代の頃、その容貌が餘りに醜くかつたため思ひをよせてゐた一人の處女から求婚を拒絶されて發奮し遂ひに刻苦勉勵、一世の樂聖と仰がれるに至つたことは、餘りに有名なことである。

不出世の英傑ナポレオンも、その輝かしい成功を一女性の感化に負つてゐた天才であつた。

ナポレオンがその最初の夫人ジョセフィンから激勵され、鼓舞され、ジョセフィン夫人の美しい姿を腦裏に浮べながら三軍を叱咤してゐた時代には、彼は向ふところ敵なき常勝將軍であつた。然し彼が一度その『正しい理性』を見失つて、ジョセフィン夫人を斥けて第二番目の夫人を迎へると、彼の活動力の源泉は見る間に枯渇して敗北の色蔽ふべくもなく、遂ひに刀折れ矢盡きて狐影消然とセントヘレナ島に流されてしまつたのである。ナポレオンは政治的術策のため第二番目の夫人を迎へたのである。その夫人はジョセフィン夫人ほどの賢い慎み深い愛情は

もつておらず、英傑ナポレオンの旺盛な活動力を刺激するだけの力がなかつたのである。

尤も、槽糠の妻に激勵され、鼓舞されて富と名譽を築きあげた後、その古臭くなつた槽糠の妻を捨て、新しい妻を娶つたため、早くも没落していつた英傑は、單にナポレオンばかりでなく、その他にも澤山あるのである。

平凡な人間が、その性的エネルギーの利用を誤つた實例に至つては、それこそ天上の星の数にも比較すべきほど多數ある。早い話が熱帶地方のインド人、マレイ人、その他の土人から餘り優れた人間がでないのは、少年少女時代から早熟の肉體に甘へて亂雑な性生活を送つて早くから身心を消耗しつくしてしまふからである。

この土人達の例ばかりでなく、文明社會に於て少年少女時代から早熟な性生活を送つたものは、大體において餘り大きな仕事をしてゐない。ヒル・ナポレオンが、米國での著明な大事業をなしとげた二千五百名の名士の閱歷を調べてみた結果、次の様な報告をしてゐる。名士の成功は大體に於て四十歳を過ぎてから、漸くその眞價を發揮してくるものであると。

八、人生は四十からといふこと

さらにこの事實の原因は何んであるかといふことを探求してみると、そこにはまた面白い原因が伏在してゐることが發見出来るのである。大多數の人が四十、五十になつて、始めて成功の緒につき始めるといふその主要な原因は、彼等がその年配に至るまでは性的衝動をそのまゝの形において肉體的に發散させ、餘りにその精力を浪費しがちになり易いといふことである。勿論その外に幾多の原因を擧げることが出来る。しかし、その幾多の原因もこの問題と切離すことは出来ないのである。

實際のところ大多數の人は、その性的エネルギーや欲望を單なる肉體的表現より遙かに重要なものに昇華することが出来るといふことを知らないのである。一般に人間生活にとつて重要なこの性的本能の昇華作用の必要とその方法を知るのは、四十歳から五十歳になる前と云はれてゐる。だから大抵の人々はその性的本能が最も旺盛な時、幾年もの間に亘つてその精力を浪

費した後なのである。

平沼男は體質の虚弱性からこの性生活より遠ざかつてゐたといふことは容易に想像されるし、ヒトラーにおいても何等かの形において四十歳の働き盛りを、その偉大な性的エネルギーを單に肉體的のみに發散させず、彼の目的とする仕事に昇華させたものに違ひないと思はれる。

人生は四十からとよく云はれてゐるが、青年時代よりその性的エネルギーの活用について正しい認識を持ち、無駄に肉體力を浪費しないやうな習慣をつけたら、三十五歳位か、それ以前に於て四十、五十の人達には及ばぬにしても、精力を無駄に浪費して過し四十になつて始めて反省した人よりも、遙かに立派な仕事ができる筈のものである。性的エネルギーや興奮を巧みに統制した人はその智力や想像力が鋭敏になつており、しかも滿々たる精力と闘志をもつてゐるからである。この意味で人生は四十からいふことはもう一度再検討されていゝと思ふ。

九、愛情と性慾

人間生活の推進力は、決して冷やかな理性でなく、人間的感情である。人は必らずしも冷たい理性的打算によつて行動するものでなく、好き嫌い、愛と憎み等の感情の中で、行動することが實際上は多いのである。

そしてこれら人間の交際の行動の推進力となる諸種の感情の中で、最も強い、そして最も根底的なものは性的感情である。一口に性的感情といひ切つてしまへば、何んだか單なる肉體的本能を指すかのやうであるが、この性的感情とは決してそんな單純なものではない。勿論、性的感情は性的本能に根ざしたものであるが、その感情は實に複雑多岐なものである。

例へばこの性的感情として指摘されるものは、男女間の愛情を始め、男女の虚榮心、異性の聲調、容貌、體格等に對する好き嫌ひの感情、男女の服裝美に對する執着等はいずれもこれを廣い意味に於ける性的感情と呼んで差支へないのである。

これ等の性的感情が人間の實際的行動の推進力であるとすれば、この感情を満たしてくれる人物や或ひは物が歡迎されることは當然であらう。

アメリカのある實業學校の教師が、自分が直接手鹽にかけて訓練した三萬人の卒業生について綿密な調査をしたところ、最も性的エネルギーの發達してゐる卒業生が最も優秀な商人になつてゐることを發見した。

この場合注意しておかねばならぬことは、こゝでいふ性的エネルギーの發達した青年といふのは何も脂肪肥りのテラテラした顔をもつた、世間でよくいふ所謂重役型の男といふ意味ではなく、秀でた容貌、均勢のとれた體格、張り切つた筋肉、敏捷な動作で如何にも男性的魅力に富んでゐる青年のことである。

かうした男性的魅力は所謂『人間的魅力』ともいはれてゐるが、實際は所謂性的魅力にほかならないのである。かゝる人間的魅力は、結局旺盛な性的エネルギーから生ずるものであるが、性の魅力は周囲の人々に快よい印象を與へ、特に柔らかない雰囲気をもたして、對人關

係に好都合である。性的エネルギーに乏しく、何んともなく疲れたやうな影の薄い人間は、決して他の人を感じさせたり熱意を起させたりすることはできない。然し對手に熱意を起させることは、如何なる場合においても絶対に必要なことである。時に政治家などになるとこれが缺除してゐることは、丁度氣の抜けたビールみたいなものであつて、凡そ無意味な存在と言はねばならぬ。つまり性的エネルギーがないと、當然の結果として性的魅力がないばかりか、その仕事に當つても力と勢が伴はないため、如何なる意味に於ても、人をひきつける力をもたないわけだ。

十、結 論

ヒットラーにせよ平沼男にせよ、この性的エネルギーを昇華してゐることに間違ひはない。ヒットラーのあの信念に徹した勇往邁進の氣魄は確かにこの昇華された性的エネルギーの所産である。だがこれは更にもう一步考へてみなければならぬ問題が横たはつてゐるのではないか

と思はれる點があるのだ。

性的エネルギーの昇華された結果が、どんな素晴らしい作用をもたらすものであるかといふことは以上で充分理解されたことと思ふが、問題はその性的エネルギーをどの程度に昇華するかといふことである。そして彼等は彼等の性的エネルギーを徹底的に他に轉化してゐるであらうか？或る人は云つてゐる。ヒットラーや平沼男のあの氣むづかしい顔は、徹底的な禁慾生活に對す闘争からだ。或ひはさうかも知れない。しかし、これは一般常人にはなかく出來ないことだ。

私が最後に諸君に言ひたいことは諸君の持つてゐる性的エネルギーを適當にコントロールして、その餘分のエネルギーを日本國家のために盡して貰ひたいといふことである。

ヒットラーや平沼男みたいな活動家が我が日本に幾十萬、幾百萬と増えていつたなら、どんな困難な問題が我等日本人の前に横たはつてゐやうとも、少しも心配することはいらないと思ふ。

附錄 成功の裏に女性あり

性的本能と性的生活について、これを女性の側からいへば、女性は凡て男性の事業を成功へと導く推進力であることを自覺しなければならぬ。女性が誰れでもこの自覺のうへにたつて、正しくその身を持するやうにすれば、おそらく人生における男性の失敗や犯罪は少くとも半減してくるだらう。

女性の立場は現實においては二つの相關聯した立場に分れる。その一つは母としての立場であり、第二は妻としての立場である。母としての義務が、次の時代を背負ふ幼い少年少女を正しく教育し、指導し、訓練することにあることはいふまでもない。

多くの偉人英傑の傳記を読むと、彼らが幼少の頃如何にその母の良き指導と教育によつて、將來の大成の基礎を定めたかよく解る。偉人英傑の背後には賢母ありとはよくいはれることであるが、實際、少年少女の幼い精神的生活に最も強い、をして最も深い影響を與へるもの

は、家庭教育を一手に引きうけてゐる母性である。家庭の母は、若しその可愛い子供たちを、將來立派な社會人にしようと思ふならば、子供たちがまだ小さい頃から勞働、規律、自主的精神、知識に尊敬の念を拂ひそれらを自ら進んで身につけるやう訓練しなければならぬ。さうすれば、その子供たちは大きくなつてから、自分の仕事や事業の規律を尊び、しかも勤勉な精神をもつて働らき、ひとかどの立派な社會人となるだらう。怠惰、放縱、不節制などの習慣を、子供時代からつけると、その子供たちは大きくなつてもその習慣をもち續け、悪くすると犯罪者の群れに投ずるやうになるかも知れぬ。然しこゝでは母性の義務を説くのが目的ではない。女性のもう一つの立場である妻としての立場について、少し考察してみたいのである。

古來、西洋の諺に「夫の運命を左右するのはその妻である」といふのがある。或るものはこれに反して「女の一生を司るものはその夫である」といふかも知れない。おそらくその何れも一面の眞理をもつてゐることだらう。然しこゝでは前の諺に重點を置いていへば、實際、妻が家庭にあつて夫に後顧の憂ひをなからしめるやうにすることは、主として家庭の外で働らき、

萬人を相手として祕術をつくして働らいてゐる夫に絶大の感激と安心を與へるものである。特にその妻が、夫婦間の愛情と性的本能の正しい關聯をよく理解し、夫の性的精力ポテンシャルを淨化しかつ昇華させてゆくやうにすれば、夫は決して外部で不健全な享樂をするやうなことはなく、家庭の中からその活動力の源泉をくみとるやうになるだらう。

若し女性が妾としてかうした性的生活に關する智識と理解をもつておらず、また單にそれのみでなく不安を與へるやうな行動でもあれば、夫も暗鬱な氣持を抱くやうになり、その氣持を粉らすために外の紅燈綠酒を慕ふやうになつて、家庭は破壊され、夫はその社會的活動の基地を失つたことになつて、仕事や事業の能率もあがらなくなるだらう。

一般に男は一夫多妻的な傾向をもつてゐるといはれてゐるが、若しさうした傾向が假りに事實あるとしても、それは妻の愛情や魅力によつて充分に喰ひとめることのできるものである。若し假りに夫がその妻に興味を失ひ他の女に氣持をうつすやうなことがあれば、それは多くの場合その妻が性的生活や夫婦間の愛情について無智であるか、或ひはそれについて餘りに無關

心であるかしたためである。外に出て自分の仕事や事業に心魂をうち込んでゐる男性には、決してそんな一夫多妻的な生理的餘裕などはある筈のものではないのである。例へ一時の氣持の迷ひから他の女に戯れたとしても、それはほんのちよつとした氣の迷ひであつて、純粹な性的愛情といふものは、眞實のところ夫婦の間にだけしか存在しないものである。また、夫婦間のちよつとした喧嘩や争ひなどは、それにお互ひが拘泥し過ぎると却つて大きくなるものであつて、特に妻がそんなものは軽いユーモアで吹き飛ばすだけの機智をもつてゐれば何んでもないことである。

妻としての女性は、男性の最も強い心の底からの願ひは、女性を喜ばせることにあり、いふことをよく自覺しておかねばならない。換言すると、男性といふものは、女性の目に大きく、そして英雄として映ること、女性から賞められ、かつ感心されることを一番望んでゐるものである。この點は、文明社會の男も、野蠻未開の社會の男も同じであり、古今東西を通じて凡ての男に共通してゐる性質である。これはおそらく男性共通の、その本能に深く根ざした虚榮心

といへるかも知れない。然しこの男性の本能的虚榮心こそ、男性の事業の推進力なのである。太古蒙昧の時代の男は、狩獵でとつた動物の皮を妻に贈つて、妻の喜ぶ顔をみて楽しんだものである。現代の男性は、妻に流行の服、身の飾りを買つてやつて、妻の喜ぶのをみて楽しんでゐる。その間の男性心理といふものは、昔と今も少しも變らないのである。ただ變つてゐるのは、妻を喜ばせる方法や手段が變つてゐるだけである。極端にいへば、男が偉大な財産を築き、名譽と力を得ようとするのも、その一面においてはそれによつて妻を喜ばせようかと思ふからである。若し男の生活から妻を、或ひは彼が喜ばせようと思ふ女を取り除いてしまつたらその事業も財産も大部分の男にとつては殆ど無意味なことである。

女性は、そして家庭の妻は、男性のかうした心理や本能をよく理解しておかねばならない。そして妻は、男性のかうした心理を利用するといへば語弊があるが、兎に角誠實な愛情と正しい尊敬の念をもつて、男性がその社會的活動によつて築きあげた財産、名譽等に對しなければならぬ。男性は自分の活動の成果に對し、妻が心からの尊敬を拂ひ、それによつてさらに自分

に對する愛情を深めてくれることを知つたら、それで十分に満足して、また次の活動に勇躍して移つてゆくものである。

男性のかうした心理と本能をよく察知し、それに對して謙讓な氣持をもつて臨み、夫が喜ぶ時には自分も喜び、夫が悲觀してゐる時には夫を慰め、鼓舞することの出来る妻は、決して夫を他の女に奪はれるやうなことなどないばかりでなく、夫をして常に安らかな氣持をもつてその仕事に向はしめ、さらに社會的に大成させることができる。

然し男性といふものは、自分が自分の妻や戀人の感化とか影響をうけて、仕事に勇躍してゐるといふことを自分で認めようなどとはしないものである。また、さうした、評判が他の男性の間でたつことを極力嫌ふものである。さらにまた、妻から夫の成功は自分の鼓舞や激勵のお蔭だといふやうな態度をされると、非常に憤慨しそのため夫婦仲にも龜裂を生ずることもあるものだ。男といふものは、妻を喜ばせ、そして妻から賞められることを喜ぶ一面があると同時に、その反面には、男性の中での最強者として待遇されたいと言ふ氣持を本能的にもつてゐる。

のである。

賢い惻巧な妻は、男性のかうした複雑な心理をよく理解しておかねばならぬ。そして妻は男性の事業のよき理解者となり、よき精神的伴侶とならなければならぬ。

犯罪の裏には女ありといはれてゐる。このこともまた事實であり、一面の眞理である。愚劣な虚榮心と放縱な性的本能だけの無智な女性に禍ひされて、多くの男性が悪の道を進つてきたし、また通りつゝあることは事實だ。然しそれと同時に、賢い惻巧な女を戀人に、妻にもつた多くの男性が、その戀人の、妻のよき理解と精神的激勵のため、偉大な社會的成功を収めてゐることも事實である。男性の成功の裏には必ずよき戀人、よき妻がゐるものだ。女性がこの自覺をもつて夫婦間の愛情、性的生活を正しく導けば、人生の荒波に落伍する男性の數はもつと減少するだらう。

ヒツトラー、平沼騏二郎は
何故獨身か

定價十錢（送料三錢）

昭和十四年五月廿八日印刷
昭和十四年五月三十日發行

著者 木 寬

發行人 森 本 薫

印刷所 大森印刷所

東京市神田區小川町二ノ二
電話市小川二五〇番一四六

發行所

東京市神田區小川町二ノ二
協同書房

電話神田(25)二六四七番

東京鐵道局公認

鐵道保養會（鐵道各社ホーム
スタンド一手販賣）

大取次

錢道弘濟會・鐵道投產會・啓徳社
昭和書房・川頭春陽堂・新正堂
石井南進堂・川瀬書店・大阪屋號